

氏 名	許 丹 青
授 与 し た 学 位	博 士
専 攻 分 野 の 名 称	文 学
学 位 授 与 番 号	博甲第 6432 号
学 位 授 与 の 日 付	2021 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学 位 論 文 題 目	1920、30 年代の日本出版文化における対中国イメージと中国認識
学 位 論 文 審 査 委 員	教授 遊佐 徹 準教授 橘 英範 准教授 西山 康一 准教授 吉田 浩 名古屋大学大学院人文学研究科 準教授 土屋 洋

学位論文内容の要旨

【研究目的と研究対象】

近代を迎えた日本は中国との関係を新たに取り結ぶ必要に迫られるとともに、近代化が進展していく過程において中国を理解するための中国像の構築に勤しみ続けた歴史を持つ。その営為に関する研究は、従来、内藤湖南、尾崎秀実、橘樸等のいわゆる「中国通」と称された知識人や吉野作造、犬養毅といった中国に関心と人脈を有した政治家の存在に注目して実施してきた。それに対しこのたび許丹青君が提出した学位審査対象論文「1920、30 年代日本出版文化における対中国イメージと中国認識」(以下、本論文と称する)は、出版というメディアに注目して、清朝崩壊後、急速に変わりゆく中国に対する日本人、日本社会の理解がどのように形成されまた提示、共有されることになったのかを解明しようとした研究である。

研究の時間的範囲を 1920、30 年代としたのは、その時期が中国においては 1919 年の五四運動を経て国民革命に向う思想的、政治的激変期であり、また日本においても大正デモクラシーに象徴される明治近代とは異なる新しい政治状況の成立、大衆の時代の到来、列強化による対外アプローチの変化という過程が進行した時代であったこと、そして両国の関係が後の全面戦争へと繋がる様々な対立の醸成期間に当たっていたことに基づくとともに、世界史的な観点に立つと日中双方が社会主義思想の影響を受けた時代であったことにも由来する。

【論文内容の要旨】

本論文は 7 章 2 部の形で構成される。

第 1 章「日本の中国認識に関する先行研究と本論の問題意識」は、近代以降の日本の中国観、中

国認識の形成と共有にとって言論空間が果たした役割の重要性とそれを扱った先行する研究の状況、そしてその問題点が示され、本論文の独創的な研究視点とその研究方法を提示する。そのなかで本論文が着目する時期が 1920、30 年代であること、そしてその時代に進歩的メディアとして日本の出版文化をリードした中央公論社、改造社、岩波書店の出版活動を中心に検討してゆくことが語られる。

第 2 章以下は 2 部構成を取る。

第 1 部の第 2 章、3 章、4 章はそれぞれ中央公論社、改造社、岩波書店に焦点を当てた分析が展開する。

第 2 章「雑誌『中央公論』と中国」では、「評論の公平」を出版方針として強調し「デモクラシーの思想をもって一世を率いた」と称される『中央公論』がどのような中国認識を読者に提示したのか、そして、当時の日本のデモクラシーの高まりがその中国認識においてどのような形で現われたのかを巻頭言と中国特集の言説を通じて分析し、1920 年代から 1930 年代まで中国の民主主義運動支持の姿勢を基本的に一貫させていたことを論証した。

第 3 章「改造社と中国」では、戦前期『中央公論』に並ぶ主要総合雑誌として世論に影響力を持ち続けた『改造』について、それが掲載した言説と出版人である山本実彦自身の中国へのまなざしに注目した分析を行った。『改造』の言説分析に関しては『中央公論』同様巻頭言や中国特集に寄せられた言説、そして座談会を分析対象とするだけではなく、当時の西洋を代表する哲学者のバートランド・ラッセルの中国に関する講演内容、寄稿文を丹念に読み込み、日中以外の第 3 者の視点を利用した中国理解の可能性の提示とその限界が分析されている。このラッセルへの注目は研究上の独創点の一つである。

第 4 章「岩波書店と中国」では、1927 年創刊の岩波文庫、1938 年創刊の岩波新書といった岩波書店の出版事業を通して、出版人岩波茂雄を中心とする岩波書店が当時の日本人に提示しようとした中国認識のあり方を古典文化と現在性双方への関心の必要性の主張という観点から分析するとともに、岩波茂雄個人の中国認識の変化と複雑性を提示した。特に後半部では岩波茂雄の「五箇条の御誓文」への心服を指摘して彼の思想性の特徴と限界を指摘してそれまでの研究を乗り越えることに成功している。

第 1 部がそれぞれのメディアに注目した 1920、30 年代の日本人、日本社会の対中国イメージ、中国観の形成と展開、受容の研究であったのに対し、第 5 章と第 6 章で構成される第 2 部は各メディアに共通する対中国イメージ、中国観について改めて検討する、いわば横断形式で 20、30 年代の出版文化の中国認識を考察する内容となっている。

第 5 章「「ヤング・チャイナ」に注目して」では、五四運動期に活躍し日本人も注目した中国の新知識階級の出現、活躍を日本のメディアが「ヤング・チャイナ（チャイニーズ）」と捉えていたことに注目する。本章ではまず「ヤング・チャイナ」の概念を明確にしたうえで「ヤング・チャイナ」の実像を分析し、彼等の可能性と限界、そして当時の日本人、日本社会の彼等への評価およびそれが生み出した対中国イメージ、中国観を明らかにした。

第 6 章「「新中国」について」では、1920 年代後半の国民革命を経て生まれた政治的に統一され

た中国を日本メディアが「新中国（支那）」と称していたことに着目し、そこに中国のどのような側面を見ていたもか、またそれが日本の国益とどのように関わるものであると考えていたのかについて検討した。具体的には『中央公論』、『改造』に発表された中国の新しい状況に言及した論文を中心に、論者の中国論を分析し、主にその対中国政策に焦点をあてて、中国に対する評価と政策転換の方向性の諸類型を明らかにした。

これら第2部における「ヤング・チャイナ」、「新中国（支那）」という呼称、表現への存在、広がりへの注目は、従来の研究方式においては成り立ちにくい研究視点であり、これもまた本研究の独創点の一つである。

第7章「まとめと展望」は、以上本論をなす第2章から第6章までの内容を各メディアの特徴と1920、30年代の特徴という2点においてまとめるとともにこの研究手法を用いた研究のさらなる必要性と可能性を提示する。

学位論文審査結果の要旨

【学位審査会の構成】

学位審査委員会は、本研究科から主指導教員（主査）の遊佐 徹（中国近代思想文化、中国近代文学）と副指導教員（副査）の橋 英範准教授（中国古典文学）、西山康一准教授（日本近代文学）に予備論文審査に引き続き吉田 浩准教授（ロシア近現代史）にお加わりいただくとともに、外部審査員として名古屋大学人文学研究科の土屋 洋准教授（中国近代史）をお招きして構成された。審査会は2021年2月5日14:00より文法経1号館103号室で2時間にわたって開催された。なお、新型コロナウイルス感染症の流行に鑑み、土屋准教授はオンラインでの参加となった。

【審査内容】

審査会は、冒頭の論文提出者から内容の概要と反省点、そして本研究の可能性、発展性についての説明に続いて主査の司会のもと、審査員各自からの概括的評価と内容に関する質問の提示およびそれへの回答という形式で進められた。

各審査委員の概括的評価として、出版文化への関心や「ヤング・チャイナ」、「新中国」といった表現への着目にはオリジナリティーがある、またそれに対する調査、検討が一次行資料を丹念に読み込むなど行き届いており、全体として読み応えのある内容になっている、予備論文審査での指摘を踏まえ構成の再検討等の整理の結果論旨が明快になり内容に深みが出ており、留学生でありながら日本語の表現も優れている、といった高い評価が示された。

その一方で、審査委員のそれぞれの研究分野（歴史学、文学、思想文化）に応じる形でいくつかの指摘、要望が提示された。歴史学の立場からは、分析対象とした言説が成り立つ理由、原因の追究も必要ではなかったか、現代の我々の理解を前提にした分析だけではなく、言説が立ち上がる当時の状況の理解が必要であるとの指摘があった。そのためには編集者、編集会議にも着目すべきで

あったという意見が歴史学、文学の立場から指摘された。また、文学の立場からは文学作品の掲載、出版も含めたより幅広い出版活動も分析対象に含めて欲しかったとの要望があった。思想文化の立場からは、各章が往々にして、当時のメディアが抱え込まざるを得なかつた矛盾やダブルスタンダードを結論としている点に対して、もう少し踏み込んだ分析が欲しかつたとの要望もあつた。その他、個別にいくつかの問題点の指摘はあつたが、この研究テーマが、研究対象を他の日本のメディア、出版物に広げることで新たな知見を生み出す可能性を秘めたものであること、さらには中国においても同様のテーマは有効に機能するであろうことが認められ、論文が内容としても十分学位授与のレベルに達していることが確認された。

【その他の研究業績、研究活動】

このたび提出された学位請求論文以外の研究業績、研究活動は以下の通りである。

◎論文——2編

- 1、「1920年代雑誌『改造』における対「中国」言説-「ヤング・チャイナ」をめぐって」(岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要(45)、2018年3月)
- 2、「バートランド・ラッセルの紹介を通して見た『改造』の対中国認識」(岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要(48)、2019年12月)

◎学会発表——3回：

- 1、《地方学会》第64回中国四国地区中国学会大会 2018年6月2日
テーマ「1920、30年代における岩波書店の出版活動と中国」
- 2、《国際研究フォーラム》第1回 浙江工商大—岡大青年研究者国際研究集会 2019年1月14日
テーマ「バートランド・ラッセルと中国・日本—ラッセルの紹介を通じて見出される日本の総合雑誌『改造』の対中国観」
- 3、《全国学会》中国社会文化学会 2020年度大会自由論題研究報告 2020年7月4日
テーマ「日本の雑誌メディアが伝えた中国国民革命—『中央公論』と『改造』を中心に」

【審査の結論】

上記の審査内容および研究業績、研究活動の状況を踏まえ、審査委員全員一致で本論文は学位授与にふさわしいと結論付けたことここに報告する。なお、学位に付す専攻分野は「文学」とする。

以上